

キリスト教はどうして多くの教派に分かれ、対立しているのか。そのような疑問をもっている人は多い。しかし、実際は、教派が存在することは、神の御霊の豊かなお働きと「神のかたち」に造られた人間の多様性を反映するもので、すばらしいことなのである。本資料は、2004 年の大野キリスト教会における教育セミナーの講演原稿を一部修正・加筆したものである(2013 年 10 月)。

教派があることはすばらしい

全世界のキリスト者がキリストにあって一つとなるために

ごあいさつ

今年度の教育セミナーにおいても、皆様とご一緒に学ぶ機会が与えられましたことをうれしく思っております。一年に一回ではありますが、その時その時に皆様が関心をもっていること、あるいは疑問に感じていることを講演できますことは、私にとっては大きな喜びです。どのようなテーマであっても、皆様の信仰の歩みに役立つようにと祈りながら、準備をさせていただいております。

今回のセミナーでは、教育担当の馬淵兄から「キリスト教界にはなぜいろいろな教派があるのか。この教派の問題にキリスト者はどのように関わったらよいのか」教えてほしい、との要望がありました。このテーマは、扱いようによっては難しくて退屈な話になってしまいます。そこで今日は、普通とはちょっと違った角度から、「教派があることはすばらしい」というテーマでお話しようと思います。この講義をお聞きいただき、「教会や教派に対する理解が変わった、自分の信仰に確信をもてるようになった」、そんなふうに見えるようになることを期待しております。

1. 同じことはいいことか？

まず、先週起こった電話の会話を紹介することから始めさせていただきます。月一回ほどですが、この半年間、私は一人の方と電話によるカウンセリングを続けています。年齢は 40 才前後、男性で、ものみの塔の王国会館(集会場)に通いはじめている関西の方です。とても知的な人で、さまざまな疑問を率直にぶつけてきます。

先週受けた質問とは、「ものみの塔は世界中で同じプログラムを、同じ時間に、同じ方法で学んでいます。しかしキリスト教会は、いろいろな教派があってバラバラで、対立しているように見えます。ものみの塔は全世界の会衆が一致しているので、神の唯一の伝達経路(神に属する唯一の組織)のように見えます。でも、キリスト教会は神の組織のように思えません。どう考えたらよいのでしょうか。」というものでした。これは、エホバの証人の方々からよく聞かれる質問です。そこで私は、このように答えました。

世界中に工場をもっている会社があるとします。その会社の従業員は、世界中のどの工場においても同じことが求められているとしたらどう思われますか。まず毎朝一斉に、同じ時間に同じ形式の朝礼で仕事が始まる。夕方方もまた皆一斉に仕事を終わり、全員が家庭に直行する。皆同じ服を着て、マニュアル通りに同じ仕事をし、給与も同じで、出来上がってくる製品も同じ。お昼のお弁当も、3時のおやつも皆同じ。世界中に散らばっている工場の建物、機械類、机や書類に至るまですべて同じ。もしそういう会社だとしたら、良い会社だとか、神が経営者だと思われますか？ これでは、まるで軍隊のようですよ。人には個性があり、顔も背丈も性格も、皆違う。服装や食べ物も、考え方や意見も、趣味や興味も、ライフスタイルや将来の夢も、人それぞれで皆違います。国によって風習や文化も異なります。だから面白いのではないのでしょうか。

では、大学の例えで話してみましよう。世界中に分校を持っている大学があるとします。どこの大学を訪れても、校舎は周囲の景観には関係なく皆同じ。教師は皆同じ学校の卒業生。教科書も、その日に学ぶことも、授業の進め方も、宿題やテストまで皆同じ。クラスでは教師が教科書を読ませ、その教科書の下方に記されている質問を繰り返すだけ。生徒が疑問を口にすることも、反論することも許されない。従って、1 年もすれば皆同じ考えを持つようになる。その大学では、時々教科書の内容が変わる。すると、クラスで発表があり、その日から、世界中に散らばる分校の教師も生徒も、一斉にこれまで学んだことを変える。こういう大学を見て、皆が一致しているので、この大学で学ぶことは唯一の真理であるとか、この大学は神が導いている組織であるなどと、言えるのでしょうか。軍隊の教育だって、全体主義国家の教育制度であっても、これほどひどくはないと思うのですが？

外国に旅行をして、ホテルでテレビのチャンネルをひねったら、どこもNHKの教育番組のみ。民放のような低俗番組はない。だからこの国はすばらしい、そんな風に考えるでしょうか。皆が同じということは、誰かが標準を決めている、指示を出している、ということではないでしょうか？ 皆がそれに疑問を持たないということは、真理だからではなく、自由に考えることができないということではないでしょうか？ 皆が一致しているから真理であるとか、神が喜んでおられる、などという考えはおかしいと思います。北朝鮮のやり方やイスラム原理主義、独裁主義や全体主義国家をよいと思われますか？ 宗教にはマインドコントロールの危険性が常にあります。ものみの塔はカルト教団だと考えた方がよいのではないのでしょうか？

こんな会話が、いつも1時間ほど続きます。相手の方は、JWTCのホームページを見て電話をかけてこられた方です。私は名前も、お住まいの場所も教えていただいているはずですが（私と連絡を取っていることが組織に知られたら、直ちに排斥されてしまいますので）。このような会話を紹介したのは、皆様に一つのことを知っていただきたかったからです。「皆が同じであるというのは、とても不自然な世界だ」ということです。皆が同じだから一つであってすばらしい。それが神に属する組織の姿である。そんなふうを考えることはやめてほしいのです。神は、人間を、キリスト者を、全く同じようなものになるように、と期待されているわけではないからです。

この自然も同様です。地球上にある海や島、山や森、台地や砂漠、同じものはありません。そこに住む生き物の一つ一つをご覧ください。それは実に多種多様です。動物の世界でも、植物の世界でも、それは変わりません。蝶一つとっても、その多彩な姿に感動を覚えることでしょ。

満天の星に輝く夜空を見上げ、ちょっと考えてくださいませんか。そこには最低1000億個の銀河が散らばっています。その一つ一つの銀河には2000億個の星が含まれています。私たちが日々恩恵を受けている太陽は、その星（恒星という）の一つに過ぎません。しかもその太陽の周りには8つの惑星があり、その惑星の近くや外側には多種多様な無数の天体が周回しています。私たちが住む地球とは、太陽系にある何万という天体のたった一つに過ぎません。しかも、このような太陽系の構造は、独自のものではありません。1000億×2000億個すべての星（恒星）が太陽系のような構造をもっているのです。私たちは、夜空に輝く星（恒星）を一つの星だと思って見えています。ところがその星（恒星）は皆、太陽系のような構造をもっています。構造はよく似ていますが、星（恒星）を構成している天体（惑星とか衛星とか、その他の浮遊物）は、どれ一つとして、同じものはありません。

では今度は、人間に目をとめてみましょう。神は人間を何の意味も持たない機械のようなものには造りませんでした。ロボットのような規格品ではありません。知性があり、感情があり、意思があります。個性が違い、顔立ちも、身体的条件も、さまざまな能力もずいぶん違います。しかも、育てられた環境、受けた教育、関心として持っている事柄、将来の夢など、百人百様です。バラエティーに富んでいるから楽しみだし、飽きないのです。神は、人間をご自身に似た最高の被造物として造られ、他の被造物を支配するよう期待されました。神は創造のすべてをご覧になり、「見よ。それは非常に良かった」（創世記1:31）と、満足感を表明されたのです。

2. 教会は一つである

新約聖書は、教会について二つの側面を明らかにしています。一つの側面は「教会は一つである」ということ、もう一つの側面は「教会は多様性に富んでいる」ということです。今日のテーマで取り扱う「教派」とは、後者つまり「教会の多様性」に関わります。もしこの点を正しく理解するならば、教派があることはすばらしいことなのだと思えるようになるでしょう。このことを学ぶことが今回のセミナーの目的です。しかし、この問題に入る前に、最初の「教会は一つである」という側面についてははっきりさせておきたいと思えます。というのは、「教会は一つである」という事実はより本質的なもので、そこをあいまいにすると、「教会は多様性に富んでいる」という側面が分からなくなります。すると、教派の問題を正しく扱えないことになってしまいます。

パウロは、エペソ人への手紙4章において、教会が「一つであること」と「多様であること」を詳しく論じています。パウロはまず、教会が一致するよう熱心に勧めます。それが出発点だからです。多様であるとは、それぞれが好き勝手なことをしてもよいということではありません。それでは、バラバラになってしまいます。教会はその本質において一つであるという大前提に立つとき、初めて多様な在り方が意味を持ててきます。問題は、教会はどういう意味で一つなのか、という点です。それは、「御霊の一致」だと、パウロは明言します。

平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののおうちにいらっしゃる、すべてのものの父なる神は一つです。（エペソ4:3-6）

パウロは、教会が一つであることの根拠として七つのことを挙げています。からだ、御霊、望み、主、信仰、バプテスマ、そして父なる神です。そのいずれもが、How to 的なものではなく、本質的な事柄であることがお分かりいただけるでしょう。

「からだ」とは、キリスト者が同じ生命を共有している存在で、それぞれが有機的な関係をもっていることを示唆しています。「望み」とは、キリストの受肉に始まり再臨の時に完成する「神の国」のことです。「主」とは、復活されたキリストご自身がこの世界を絶対的な主権をもって支配されていることを指します。「信仰」とは、人間が神に対してもつべき最も基本的な態度のことを言います。「バプテスマ」とは「死と葬り」を意味する儀式で、罪とこの世に対して決別したことを表現しています。「父なる神」とは、万物の創造者である神がキリスト者に「神のいのち」を付与してくださったことを表わすとともに、全被造物を相続財産として人間に託されたことを含んだ表現です。

七つの根拠の二番目の「御霊」は、最初の勧めの言葉「御霊の一致を熱心に保ちなさい」の中にも出てきます。このキリスト者が受けている「御霊」こそ、キリスト者が一つであることの最も大切な根拠であり、実態なのです。七つのすべてが重要ですが、「御霊の一致」にそのすべてがかかっているとも言えます。初代教会では、福音が宣べ伝えられているプロセスにおいて、「福音を信じたとき聖霊を受けたか」という点が問題にされました(使徒 2:38、8:15-17、10:45、11:17、19:2、)。つまり、福音の受容において最も重要かつ中心的な出来事は、「信じた人が聖霊を受ける」という事実にあったのです(ローマ 8:10、Ⅱコリント 13:5、ガラテヤ 2:20、4:6、コロサイ 1:27)。教会は、ペンテコステのときに聖霊が注がれ、誕生しました(使徒 2 章)。この事実を決して忘れてはなりません。

キリスト者は、自分がキリスト者であるという「しるし」をどこに求めているのでしょうか。多くの人が「バプテスマ」を挙げます。それは、人々に見える形のしるしです。信じたキリスト者の中に起こる「実態的な出来事」は、「聖霊を受ける」ことにあります。キリスト者になれば、義と認められる、永遠のいのちをいただく、神の愛に生きる、神の臨在を味わう、罪やサタンに勝利する、祈ることができる、神の被造物管理の責任を果たす、など神からのすばらしい祝福が伴います。そのすべてに関わり、その根底に横たわっているのが「聖霊を受ける」という神の賜物です。この「聖霊を受ける」という経験がなければ、キリスト者と呼ぶことさえできません。聖霊の受容、この体験こそが「キリストのからだを構成させる最低の資格(そしてそれは、最高の資格なのですが)」なのです。

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。(ローマ 8:9-11)

この方にあつてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。(エペソ 1:13-14)

繰り返して言います。教会が一つであることを確認できるのは、キリスト者すべてが「聖霊をいただいている」ことにあります。これ以外ではありません。バプテスマを受けたかどうか、聖餐式に対し同じ理解をもっているかどうか、同じ神学に立っているかどうか、エキュメニズムの一致祈禱会に参加しているかどうか、一緒に礼拝の時をもっているかどうか、使徒信条を告白しているかどうか、そういうものでは一切ありません。聖書によれば、神の御霊を共有しているかどうか、その点だけです。

キリスト者はすべて、聖霊を受けています。カトリックであろうとプロテスタントであろうと、それは関係ありません。聖霊を受けていることが神の命を持っていることです。神の子になったことであり、永遠の命を受けたことであり、約束の復活の体をいただけることであり、天国の切符を手にしていないことに他なりません。教会の一致を他のものに求めてはなりません。聖霊の受容以外に求めることは、多様な事柄の一つを持ち出すことになり、混乱を招きます。どのようなものを掲げても、それは結局教会の一致をもたらすものにはなりません。一般に言われるエキュメニズム(教会一致運動)が進まないのは、この点がよく分かっていないからです。

教会史を見ますと、御霊の特殊な働きや賜物を強調するグループが絶えず生じてきたことが分かります。そしてその結果、他のキリスト者たちの間に御霊に対するアレルギー現象が起こり、御霊を軽視したり、危険視したり、無視したりする傾向を生じさせました。これはまことに不幸なことだと言わねばなりません。教会はいつでも、聖書

の語るところに戻らねばなりません。それは「御霊による一致」です。あなたも私も、お互いキリスト者である限り、御霊を受けています。それ故に、お互いは神の子であり、兄弟姉妹なのです。ここに教会の一致があります。教会は神を父と仰ぐ家族であり、神のいのち(聖霊)を共有している「一致した存在」なのです。

3. 初代教会は多様だった

教会はそのスタートの時点から御霊による一致を持っていました。すなわち、すべてのキリスト者は例外なく御霊を受けた人々でした。このことは、今日に至るまで変わりません。いつの時代であろうと、どこの国であろうと、どこの教派に所属しようとして、キリスト者であるとは神の御霊を受けた人々のことです。

しかし、一人一人のキリスト者は皆、さまざまな違いをもっています。性格も違えば、能力も違います。関心も違えば意欲も違います。置かれた時代や場所、環境によってニーズも異なります。御霊はそれぞれの内に働かれるのですが、決して一様ではありません、御霊に導かれ、御霊に満たされたら、皆が同じになるということはありません。御霊は、キリスト者をその人らしく育てます。そして、その人にふさわしい賜物を用意されています。その人が与えられた使命を果たすためです。

パウロは、教会がキリストのからだであることを、エペソ人への手紙とコリント人への手紙第一で論じています。前者ではからだ一つであることを、後者では多くの器官があり、多様であることを強調しています。

ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。(Iコリント 12:12-14)

ここでもパウロは、まずキリスト者が御霊を受けたという点で「一つである」ことを強調します。しかしそれにとどまらず、からだは「ただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っている」と続けます。この後の12章15-31節には、手、目、耳、鼻、頭、足などを各器官の例として挙げ、延々と論じます。しかも、それぞれの器官は、他の器官に向かって「あなたはいらない」ということはできないと強調します(15-21節)。そして比較的弱い器官、見栄えのしない尊ばれない器官こそ重要で(22-25節)、からだ全体が分裂せず、調和をもって働くことの重要性を強調しています。

パウロが「からだと器官の類比」を述べる時、「教会と個々のキリスト者との関係」が念頭に置かれていたことは間違いないでしょう。パウロとペテロは違います。ヨハネと他の使徒たちもそれぞれ皆違います。人前に立って目立つ人もいれば、後方支援に回されている人もいます。スター的な人もいれば、存在感ゼロの人もいます。個性が違い、働きや使命が違い、賜物が違うからです。初代教会に登場する人々は皆違います。

しかしこの類比を「一つの教派と個々の教会との関係」において、さらには、「全世界に散らばるすべてのキリストの教会と個々の教派との関係」に適用することはいかがでしょうか。私は、それも含まれていると思うのです。

初代教会は皆多くの点で違っていました。例えば、統治形態です。エルサレム教会は最初、12使徒たちが中心になって形成されていましたが、食糧の分配問題に直面し、執事を選んで問題の解決に当たらせました(使徒6章)。ローマ教会はたくさんの信徒リーダー達によって(ローマ16章参照)、ピリピ教会は「監督」とか「執事」と呼ばれるリーダーたちによって運営されていました(ピリピ1:1)。コリント教会は霊の賜物が豊かで、今日のカリスティックな雰囲気が漂っていました(Iコリント14章)。教会は、それぞれの地域に立てられたリーダー的な人々によって、その地域にふさわしく形成されていきました。そこには、御霊の自由なお働きがあったのです。

初代教会は、それぞれ違った教理的・神学的・実地的な課題をもっていました。例えば、テサロニケ教会は「再臨の時はいつか」ということが大きな問題でした。ピリピ教会では二人の婦人が仲違いをしていました(ピリピ4:2)。コロサイ教会には空しい哲学が入り込んで混乱していました(コロサイ2:8)、ガラテヤ教会では律法主義者たちが教会をかく乱していました(ガラテヤ1:6-10)。コリント教会に至っては、「問題ばかりの教会(the church of problems)」と呼ばれるほど、深刻な問題を抱え込んでいました。

初代教会はまた、それぞれほめられるところもあれば、叱責されねばならない事柄もありました。このことは、アジアの七つの教会(エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤ)に宛てられた手紙を一読すれば明らかです(黙示録2-3章)。いつか時間を取って、七つの教会それぞれに対する称賛と

叱責の言葉の一覧表をつくってくださると、とても面白いと思います。

さらに、新約聖書の著者たちは、福音をさまざまな違った言葉や概念によって表現しました。それは、福音が一言では言い表せないほどの豊かな内容であると同時に、福音を受け取る側の背景や理解度、関心事が違っていたからです。例えばイエスは、ユダヤの民衆に「神の国」というキーワードを用いて、福音を明らかにしました。パウロは、パリサイ人的背景からでしょう、キリストの十字架の贖いを強調し、「信仰義認」とか「神との和解」を強調しました。ヨハネは「永遠のいのち」とか「神の愛」を福音の中心に置きました。ヘブル人への手紙の著者は「新しい契約」あるいは「キリストに基づく新しい祭儀制度」によって福音信仰を解説しています。一方ヤコブは「行いのない信仰などあり得ない」と、パウロと対立するかのよう言い方で、救いを説明しました。ヨハネの黙示録は「教会の勝利」を福音として描いています。これらの表現の違いは、福音の違いではなく、それぞれのメッセンジャーが、受け手が一番理解しやすいような言葉や概念、メタファーを使った結果なのです。

初代教会の宣教方法もまた、時の流れの中で変わっていきます。使徒の働き の 2 章では、聖霊が注がれて教会がスタートします。2 章から 6 章ぐらいまでは 12 使徒たちがエルサレム神殿を中心に活動を展開しました。ところが、教会に対する迫害が始まり、8 章以降は、サマリヤの街や異邦人への伝道が開かれていきます。13 章以降は、アンテオケの教会が中心となり、アジア地域の宣教を進展させます。16 章になると、ヨーロッパ伝道への道が開かれ、世界宣教も地理的な広がりが大きくなります。17 章のアテネのアレオパゴスの丘におけるギリシャ人向けの伝道説教、18 章のパウロのコリントにおける 1 年半の腰を据えた牧会伝道、19 章のエペソのツラノの会堂における 2 年間のパウロの伝道、22-26 章のパウロのユダヤ議会における信仰の弁明、27 章以降のローマ宣教など、教会はさまざまな宣教を展開します。すべては御霊の導きに従って行われたのです。

もう一度繰り返します。これらの背後にあって、初代教会の歩みのすべてを導かれたのは神の御霊です。たくさんの方々が初代教会の形成に関わっていましたが、それらの一切を統括し、導かれたのは御霊です。特別な人物や組織ではありません。キリスト者に内住される御霊が、それぞれをお用いになり、多様に働かれたのです。このような初代教会における御霊のお働きこそ、教派問題を考えるときの出発点になります。

4. 教派は歴史の中で生まれてきた

教派は、教会が歴史の中で形成されていく過程の中で、生まれ、成長してきました。それは、ごく自然なことでした。教派形成の歴史とは、キリスト教の歴史そのものといえるでしょう。本当は、丸一年間ぐらいか教会史を学ばないと、教派問題を正確に理解するのは難しいでしょう。しかし今日は、教派の存在理由に迫りたいだけです。大雑把に教会史を紹介するにとどめましょう。

使徒パウロを中心としたキリストの弟子たちは、アンテオケを中心に地中海の東側にあった諸都市に伝道を展開しました。その結果 1 世紀の終わりごろには、キリストの福音はローマ帝国一帯に広まりました。その活動の中心地は、コンスタンティノポリス、エペソ、ニケア、カルケドンなどの諸都市で、ギリシャ語を話す教父たちが中心になって活躍していました。

ところが、395 年にローマ帝国が東西に分裂するに及び、福音宣教の中心は、東側から西側に移行し、ラテン語を話す教父たちが活動の中心を担うようになりました。彼らは、地中海西側のローマを中心として活動を展開しました。

キリストの教会は、時代の流れ、地域的な特色、個性的な人物たちの影響を受けながら形成されていきます。東側の教会では、1 世紀から 4 世紀にかけ、多くのギリシャ教父が教会や修道院を建て、すばらしい神学的な著作も生み出しました。その伝統は今日のロシアや東欧諸国の「ギリシャ正教」に引き継がれました。その遺産をもう一度見直そうとする動きは、20 世紀後半にパネンベルグという神学者や霊性運動を強調する人々によって進められました。カッパドキアの神学者たちの黙想とか、神の経綸的三位一体論、聖霊論的キリスト論などという神学については、以前お話ししました。

西側のローマを中心とした教会は、アウグスティヌスをはじめとするラテン語を使う教父たちの活躍によって形成されました。その教会は「カトリック(公同)」と呼ばれるようになりました。そこでは、ギリシャ哲学に基づくキリスト教神学の体系化が進み、中世のヨーロッパ社会に大きな影響を与えました。

カトリック教会は、ヨーロッパの政治や文化に翻弄されながら、1000 年以上の時を費やして形成・発展したものです。その過程で、多くの点で聖書から逸脱し、時代的風潮に煽られるところが少なくありませんでした。16 世紀

になると、そのような事柄を改め、聖書に戻ろうとする宗教改革運動が起こり、プロテスタントというグループが誕生しました。その代表的な指導者はルターやカルヴァンでした。

そのようなプロテスタントの動きに大きな刺激を受け、カトリック内部にも反省が起こり、反宗教改革運動に立ち上がる人々が現われ、多くの問題点を改善しました。そのような保守と改革のぶつかり合いは、それ以降のカトリックの流れの中に続き、20世紀半ば(1962年から65年)の第二バチカン公会議にまで続きました。現在のカトリックは、今もその改革を模索中なのです。

カトリック教会の信仰を正そうとして生まれたプロテスタントは、カトリックの法王の権威に対抗して聖書の権威を掲げ、誰でも自分で聖書を解釈できると主張しました。その結果、従来のカトリック教会が説いてきた教理や神学、あるいは教会組織や活動とはかなり違うものを生じさせました。その主な動きだけでも紹介しておきましょう。

ルター派は、十字架の奥義や信仰義認を強調しました。この教派はドイツや北欧において盛んになり、その多くは国教会になりました。礼拝形式はカトリックの伝統を引き継ぎ、儀式的要素の強いのが特色です。

改革派・長老派と言われるグループは、神の主権、神の栄光、神の予定などを強調しました。改革派という表現は神学的側面を、長老派とは長老制度による教会政治を強く意識した呼び名です。この教派は、オランダあるいはオランダの植民地国家、さらにアメリカに強い影響を与えました。

17世紀になると、イギリスの教会がカトリックから分離し、聖公会(イギリス国教会)を結成しました。このグループは、一般にはカトリックとプロテスタントの中間に位置づけられます。組織の形態や礼拝形式はカトリックに似ていますが、信仰内容はプロテスタントに近いからです。18世紀から20世紀にかけて生じたイギリスの植民地国家に大きな影響を与えました。

18世紀のイギリスに現れたジョン・ウエスレーたちのグループは、キリスト者の聖潔を強調し、メソジスト系のグループを結成しました。教会政治は監督制に近い形が継承されています。アメリカの教会に大きな影響を与え、そこから世界中に大きな影響を与えることとなります。

18世紀から19世紀にかけ、国教会系のプロテスタントからより強く信仰の自由を求める人々が出てきて、バプテスト派を結成します。彼らは、政教分離を強く掲げ、教会政治は会衆制、個人の信仰告白を重要視して浸礼を主張しました。その多くはアメリカに自由を求めてやって来たので、アメリカで最大の教派になります。

同じ頃イギリスに発生したブラザレン・メノナイト派と言われるグループは、聖書を字義どおりに解釈しました。絶対平和主義を掲げ、教職制を認めず、信徒は皆平等であると主張し、教会・教派形成を進めました。個々の教会の独立性が尊重されました。

19世紀に入ると、キリストの再臨運動が盛んになりました。特に、1843年にキリストが再臨されると、聖書のある部分を解釈し、アメリカを中心に再臨待望の運動が起こりました。この再臨予言は外れてしまうのですが、この運動から、アドベンチスト教団始め、セブンスデー・アドベンチストなどのグループが生まれました。今日の異端グループ、ものみの塔などもこの運動から出てきました。

20世紀初頭には、聖霊の特別な働きがあり、異言を伴う聖霊体験をする人々がいろいろな教派の中に現われました。そのような人々が集まり、リバイバル運動などを展開し、ペンテコステ系の教派を誕生させました。アッセンブリー教団とか、フォースクエア教団などがその例です。

なお、20世紀半ばから後半にかけ、教派を横断して、聖霊の「しるしと奇跡」と言われる働きが現れました。その結果、カリスマ派と呼ばれるグループができ上ります。彼らのある人たちは、既成の教派から分離して別の教派を形成しましたが、多くのキリスト者は自分の教会に留まり、教会内改革を目指しました。このため、教会・教派内にさまざまな軋轢・緊張関係が生じました。

なお、19世紀から20世紀にかけ、世界宣教のヴィジョンを実現するために組織された宣教団体は、多くの宣教師を第三世界に派遣しました。その結果生み出された教会は、自由教会の形式をとり、福音宣教を重視する以外、これといって目立った神学的な特色をもっていませんでした。その礼拝や教会形成は、各個教会に任さ

れ、比較的自由なスタイルが重んじられました。このようなグループに加え、独立・単立の教会がたくさん生まれました。その内のある教会は、神学的あるいは人間的な理由から既成の教派を脱退した結果生まれました。このような教会の多くは、他から干渉されることを嫌い、独立性を重んじました。

ここまで、世界の教会の教派形成過程をたどってきました。では、日本の教会の教派問題はどのようになっているのでしょうか。この問題についても、簡単にふれておきましょう。

日本におけるカトリックの宣教は、1549年フランシスコ・ザビエルによって始められました。豊臣秀吉の時に伴天連禁止令が出て、それ以降カトリックの布教は途絶えました。カトリックが本格的に伝道を再開するのは、明治になってからでした。ミッションスクールの働き、あるいは修道院を中心とした社会活動を中心に、地道に宣教活動を展開しています。

ギリシャ正教の日本布教は、ロシア領事館が1859年に函館に設置されたときに始まります。日本では、お茶の水にニコライ堂などがありますが、他の教派ほど活発には活動していません。

プロテスタントの宣教は、鎖国解放の1859年に、リギンス(聖公会)、ヘボン(長老派)、フルベッキ(改革派)などの来日に始まります。宣教師たちは、最初の10年間は教派色を出さずに宣教活動をしていましたが、1870年にゴープル(バプテスト)が横浜に横浜第一バプテスト教会を設立するに及び、以降の宣教師たちの活動は教派色を前面に出したものになりました。

日本の教会の特殊性は、第二次世界大戦時代に日本国政府によってキリスト教は一つにまとめられ、日本キリスト教団が成立したことにありました。その後敗戦と同時に、多くの教派が日本キリスト教団から離脱し、もとの教団を再形成するようになりました。バプテスト連盟や同盟、ルーテル系の教派、ホーリネス教団、ナザレン教団改革派教団などがその例です。しかし、かなりの教会が日本キリスト教団に留まり、今日でもプロテスタント最大の教派を形成しています。教団はたくさん抱えておりますが、それは他の教団でも同じことで、その信仰告白は正統的・福音的なものです。

戦後、アメリカを中心にヨーロッパからも、多くの宣教師が日本に送られてきました。宣教師たちは、日本全体をいくつかの地方に分け、それぞれの教派が活動地域を分担しました。保守バプテストやルーテル同胞は東北地方、三重・和歌山県はバプテスト教会連合、ドイツ同盟は岐阜県を中心、スウェーデン聖約は岡山県といった具合でした。

1959年、宣教100年を記念した集いをきっかけに、日本プロテスタント聖書信仰同盟が結成されました。以降、その組織は日本福音同盟に再編成され、日本伝道会議やさまざまな宣教会議を開きながら一致結束を図ってきました。このような動きは、世界でも珍しいと言わねばなりません。

5. 聖書に基づくエキュメニズムの姿を求めて

1910年、エジンバラで世界宣教会議が開かれ、全世界の教会が一つになろうという、エキュメニズム(教会一致)運動が起こりました。この運動の影響を受け、カトリックは第二バチカン公会議を経て、エキュメニズムを積極的に推進するようになりました。ところが、プロテスタント側は、最初は熱心でしたが次第に熱が冷め、ごく一部の人の運動に変わってしまいました。福音派は、この種の動きには初めから懐疑的で、福音派内だけの交わりを熱心に形成しようという動きに終始しました。

2000年に入りカトリックとルーテル派が和解しましたが、それ以降このエキュメニズム運動は大きな進展を見ていません。その理由は、エキュメニズム運動が目指している「教会の一致とは何か」という基本的な概念があいまいなためです。この運動に関わっている人々自身が、どのようにこの運動を進めてよいのか分からなくなっているからです。多くのキリスト者が、教派の一致とは教理や神学を一致させること、あるいは礼拝や一致祈祷会、宣教に関する集いをともに開くこと、と考えているからです。

神学的な違いを理解し合うことは必要でしょう。しかし、その違いを摺合せ、一致させようとするのは土台無理な話です。教派間にある教理の違いの多くは真理の問題というより、信仰を受け止める側の関心事、あるいは認識や表現の問題です。それは、時代や場所、民族性や文化などによって大きな影響を受けた結果生じた違いです。スコラ哲学と神学は、中世の人々には有効でした。ルターやカルヴァンの神学は16世紀には大きな影響

を与えました。近代から現代へと時代の流れは大きく変わり、人々も変わってきました。教会はその時代その時代にレバンスー(順応性、あるいは適応性)を求められています。よきものを継承し、合わなくなったものを改良し、その時代の人々への責任を果たせばよいのです。神学の問題は、宣教の視点から「ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のように」という原則に基づいて考え直せばよいのです。

「一致」とは、神学的な一致でもなければ、イベントにおける一致でもありません。一致祈禱会を開くこと、教派を超えた地域の牧師会、全教会合同の市民クリスマス会、共に礼拝をささげたり、聖餐にあずかること、そういうイベントが教会の一致ではありません。宣教会議を開いたり、何らかの交流を深めることでさえありません。

もう一度、新約聖書の教会観に戻りましょう。教会とは御霊を受けた者たちの集まりです。キリスト者は皆が神の家族であり、教会の一致は既に存在しているのです。ここで大事なことは、御霊の多様な現れである教派の違いがなぜ必要だったのかという点をきちんと整理しておくことです。

イエスは、神の国を説かれました。この神の国とは、神が王である領域を指します。それは、キリストの贖いが完成し、キリストが支配者となることによって始まりました。しかもキリスト者は、キリストと共に支配する者として召されたのです。教会は、そのキリスト者の集まりです。いろいろな違いをもつ教派が存在したのは、歴史の中で形成されていく「神の国」にいろいろな働きが必要だったからです。いろいろな時代にさまざまな場所において、御霊はいろいろな違いをもつ教派を用いて、御業をなさってきたのです。そこには、今の時代には不要なもの、余分なもの、捨て去るべきものがたくさんあることでしょう。新たに加えねばならないものもたくさんあるはずですが、それは、どのような教派であっても、同じことです。教派の優劣を話題にすることは愚かなことです。そういう評価の問題は、御霊なる神ご自身にお任せしましょう。私たちは、自分の分を果たせば、それでよいのです。

教派の違いは、多くの違った人々を神の国にお招きするのに有効です。カトリック的な生き方や雰囲気合う人や求める人は、この世の中にたくさんいます。改革派神学やその体質をアットホームに感じる人もいれば、ルター派に親近感を感じる人もいます。ホーリネス的なものを渴望する人もいれば、カリスマ的な信仰にぴったりと感じる人も少なくないはずですが、フィリップ・ヤンシーの信仰に心惹かれる人もいれば、ゴスペル音楽に心酔する人もいます。

天国に行くことを最大の関心事にしている人々はいつの時代にもいます。ダンテの「神曲」やバンヤンの「天路歷程」が流行するのは、中世や近代の世界だけではありません。しかし、現代人をそういう人ばかりだと想定するのは間違っています。ある人々には4つの法則(神、罪、贖い、天国)は、福音宣教の有効な手段でしょう。しかし、現代人のすべてがそのような救いを求めているわけではありません。福音の豊かさを確認し、その人その人に最も有効なメッセージと手段を見出すことが、現代の教会に求められているものです。

私は、キリストの福音を「人間の被造物管理権の回復」と捉えています。その理解もまた、すべての人に即あてはまるわけではありません。社会の問題に全く無関心な人々もいれば、政治や社会的な問題に一喜一憂している人々もいます。地球環境や自然科学に興味を持っている人には、自然科学から、現代音楽に興味を持っている人にはその角度から、スポーツや芸術、ビジネスや国際問題に関心を持っている人には、同じような関心を持つ人々が近づきやすいのです。いろいろな教派が存在するのは、すべての人々に福音を届けるためなのです。

結論

教会は、御霊を受けた人々の集まりです。その御霊は、歴史の中で、教派・教会を通して様々な働きを展開されてきました。この間キリスト者は、いつでもこの御霊の導きに信頼し、従順であったわけではありません。否、現実にはむしろ、逆でした。教会は、失敗と挫折を繰り返して、多くの汚点とシミに覆われています。しかしそれにもかかわらず、御霊なる神は教会を見捨てず、教会を通し、歴史の中に「神の国」を形成され続けてこられたのです。

現在のキリスト者と教会は、この大きな遺産の流れの中に置かれています。その豊かな遺産を受け継ぎながら、間違ったところを悔改めて御霊の導きに立ち返り、喜んで自分たちに課せられた使命を果たすことが求められているのです。それぞれの教会と教派が、もう一度、御霊の自由なお働きの中に身を任せ、御霊の自由なお働きを求めることが大切です。世界中のどの教会にも働いている御霊のみわざを崇め、その働きに心からの感謝をささげましょう。そして、何よりも神の国の前進を喜び、神のみ名を誉めたたえましょう。

キリストは万物の主であり、教会のかしらです。やがて、私たちを迎えにお出でくださいます。その時を心から待ち望み、「主よ、来りませ」と、心より賛美をささげましょう。